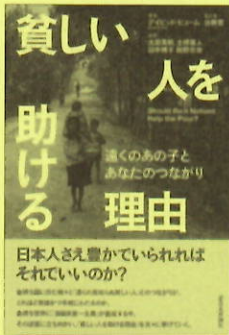


学生に読ませたい本

石井 梨紗子



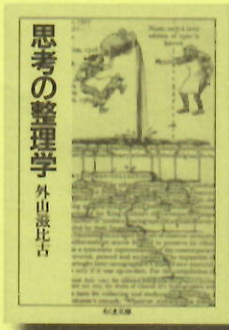
『貧しい人を助ける理由—遠くの子とあなたのつながり』

著者：デイビッド・ヒューム／監訳：佐藤寛 日本評論社

本書はイギリスの開発学の大家である David Hulme が、イギリスの一般の読者向けに書き下ろした本の訳本で、毎年私が担当する法学部ゼミナール I でも購読してもらっている一冊です。原題が “Should Rich Nations Help the Poor?” であることから分かるように、Hulme は「なぜ先進国は国民の税金を投入して途上国を支援する必要があるのか？」という一般市民の問いに答えるべく本書を執筆しました。この問いは、私が「国際協力論」の講義を行う際に、学生から幾度となく受けてきた問いかけでもあります。本書で Hulme は、この言ってみれば、開発に携わる人々が日常的に受けてきたであろう一般的な問いに対して、

道徳的な義務、植民地支配の歴史や気候変動問題等に対する先進国の道徳的責任、移民問題や疾病の蔓延等を防ぐための共通利益、政治的・商業的な利益と、様々な側面を挙げて説明しています。各国政府が国際協力を行う理由の一つとは限りません。同時に、民主主義国家においては、その政府を信任しているであろう個々の国民が異なる国に暮らす人々に対する支援を道徳的な責任として受け入れた場合、国際協力に多くの理由をつける必要はなくなるのです。多くの視点から国際協力を論じながらも、Hulme が最も伝えたいのは、まさに私たち個人が道徳的な観点から途上国の問題に向き合おうとすることの重要性のように読み取れます。こうしたことから、本書の翻訳者達もこの本に邦訳を付ける際、敢えて「政府」ではなく「あなた」を主語にしたタイトルを選んだのではないかと思います。多くの学生に読んでいただいて、「遠くの子」との繋がりを考える機会を持って欲しいと思います。

—*



『思考の整理学』

著者：外山滋比古 ちくま文庫

大学生が読むべき書籍のランキングに常時載ってくるベストセラー本なので、既にご存知の方も多いでしょう。それでもなお、専門外で 1 冊選ぶとするとやはりこの本かなと思います。筆者は本書で、受動的な学びの能力を「グライダー型」能力、自力で発明・発見する能力を「飛行機型」能力と名付け、「グライダー兼飛行機」のような人間を目指すための心がけを説いています。情報の集め方と捨て方、アイディアや考え方の整理の仕方から、朝飯前の生活スタイルまで、大学生がすぐにも実践できる習慣が多く紹介されています。また 1980 年代の著作

でありながら、「従順だが自力では飛べないグライダー人間」の育成に偏る学校教育を憂い、このままでは飛躍的なグライダー能力を持つコンピューターに仕事を取られてしまうと警鐘を鳴らしている点は、筆者の先見の明をよく示しています。グライダーとして優秀な学生ほど自ら考えたテーマを持って論文を書くことに手こずるという指摘には、大学教員として大いに頷ける一方、「いまの教育は教える側が積極的でありすぎる」のくだけりにはドキッとさせられます。「AI に負けない人材育成」が叫ばれる 2020 年代の今読んでも全く色褪せない議論こそが、本書が時代を越えて広く支持されてきた理由でしょう。 (法学部准教授)